百々裏話（52）

おもてあきら

〔多武峰の能―その二―〕

前回、多武峰八講猿楽が、法華八講ではなく、維摩八講に附随する行事であったことを考証した際に、〝八講猿楽の記録に法華八講との関連を示す記事が一つもない〟と書いたが、その後、金春禅竹の伝書『明宿集』に、

多武ノ峯ニヲキテ、毎年法講ノ神事、四ノ座ヲモテツトム。

とあることに気がついた。決講はあまり聞きなれない言葉で、法会と同じ意味、或は八講の訛りであることも考えられなくはないが、法華八講の略である可能性が強いように思われる。とすれば、禅竹は八講猿楽を法華八講の際の行事と考えていたことになるが、八講といえば法華八講を連想するのが常識であった事や、禅竹時代には八講猿楽参勤の事が長く絶えていたことに基づく誤解と見なしてよかろう。以上、前回分への追加である。

◎多武峰様猿楽

多武峰で演じられた猿楽能の特色としてよく知られているのは、本物の甲冑を用い、生きた馬に乗って能を演ずるという、野外劇を思わせる演出である。それについては、小林静雄氏の「多武峰様猿楽考」（同氏著『室町能楽記』所収）及び「多武峰猿楽追考」（『観世』昭和11年一月号）が最も詳しく、別に追加できる資料を持ち合わせない。ただ、多武峰様猿楽の演じられた記録が、正長二年（一四二九）五月の室町殿笠懸馬場での観世両座対宝生・十二連合の座の立合猿楽、永享六年（一四三五）七月の室町殿での明国使節饗応猿楽の観世演能、寛正六年（一四六五）九月足利義政南都下向の際の一乗院での四座立合猿楽、同年十月室町殿での観世演能の、僅か四回しか残っておらず、能役者の間に伝承が残っていない点からも、応仁以後には、多武峰でも他の地でも、そうした特殊な演出は絶えてしまったと考えられることを追加しておきたい。また多武峰様で演じられた曲目についての小林氏の推測は、寛正六年九月の四番についての説は承服できるが、正長二年の『建内記』に見える綾織・一谷先陣・秦始皇の三曲をすべて多武峰様で演じたと見なす説は無理であろう。十郎（元雅）が義経を、三郎（元重）が梶原を甲冑姿で演じた由の注記のある一谷先陣（廃曲二度掛らしい）のみと考えたい。

◎八講猿楽の新作競演

一方、多武峰猿楽の特色が、甲冑実馬のいわゆる多武峰様のみでないことを初めて指摘

＊すべて全曲を収める素謡稽古用全集＊　第1期刊行50番・38冊

観世流・声の百番集

監修＝高橋誠一郎
編集＝丸岡明

■好評既刊

①高砂・竹生島　1000円
観世元正・上田照也・浦田保利・坂井音重／観世静夫・観世武雄・浅見真広・鵜沢雅

⑯小袖曽我・鵜飼
観世元正・観世元昭・藤波順三郎・藤波重満・野村四郎／観世銕之丞・観世寿夫　観世静夫・山本順之　1000円

⑲敦盛　観世寿夫・山本勝一・観世静夫・山本真義　800円

⑳経正・猩々　800円
観世銕之丞・観世静夫・鵜沢雅／藤波順三郎・藤波重和・藤波重満

書店でお求め下さい　自由分売も致します　筑摩書房　東京神田

されたのが、香西精氏の「多武峰―世子語抄(六)」(『宝生』昭和37年七月号)である。氏は、『わらんべ草』四十六段の注に、

昔は、たうのみねのはつかうの能に、四座共に立合なり。其折節は、一座に一二番づつ作能をいだす。……

とあるのを主たる根拠として、多武峰八講猿楽に各座新作能を発表して競う慣習があったことを推論された。香西氏の指摘の如く、四位の少将は、根本、山とに唱道の有しが書きて、今春権の守多武峰にてせしを…という『申楽談儀』の記事や、『禅鳳雑談』の、碁の能は左阿弥作候。宗筠、多武峰にて、空蟬、唐織物にて花の帽子にて出られ候。まことの空蟬もかくやと思ひやられ候。

とかの記事は、能の新作・初演と多武峰とが結びついており、多武峰が早くから新作発表の場であったことを示していると言えよう。〃観阿が舞わなかった天女を、遺言によって世子が大和で舞い初めた〃という『申楽談儀』の大和も、恐らく多武峰であったろう。

以下、少しく香西説の補強を試みたい。

観世新九郎家文書の中の、『観世宗兵衛豊俊伝書』(正保五年奥書)に、

一、此大和国多武嶺ノ能をバはつかうの能と云。四座共ニ、毎年新シキ能を一番づつくりタルと申伝候。

とある。『わらんべ草』の記事とあいまって、八講能新作競演についての伝承が、江戸初期には明確な形で残っていた事が知られる。

同書はまた、四座立合の翁を演ずるのが多武峰猿楽の風習であったと伝えており、それについては次回以後に詳述するが、極めて確実な伝承に相違ない。その点からも注目されるのが、慶長九年(一六〇四)八月、秀吉の七回忌を記念した豊国神社臨時祭の能である。この能の際には、片桐登氏が「豊国神社臨時祭の猿楽」(『能楽思潮』34号)で論証された如く、金春は橘、観世は武王、宝生は太子、金剛は孫思邈と、各座が一番ずつ新作能を演じ、しかも四座の立合の翁も行われたのである。この時の能が多武峰猿楽の形式に準じたものであることは疑いないものと思われ、逆に、この時の新作能上演の事実を、多武峰猿楽に新作競演の風習があったことの例証と見なしてもよいであろう。

さらにまた、多武峰様猿楽の例として名高い寛正六年九月の将軍南都下向の際の一乗院での四座立合猿楽も、『親元日記』には「於御前猿楽(四座立合。多武峰様能在之。馬鍬用之)」、『東大寺法花堂要録』には「四座猿楽間、此内一番ヅヽ、坫峰様ヲスル也」とあって、両書ともに各座一番ずつ演じた実馬甲冑姿の能のみを多武峰様と見ているが『蜷涼軒日録』は「四座四翁列

観世流
入門稽古本
全三巻
半紙判　和装糸綴　ビニールカバー付

●上巻発売中　四三〇円　〒75円
《牧歌曲目》鶴亀・田村・羽衣・橋弁慶・紅葉狩

●中巻発売中　四三〇円　〒75円
《収載曲目》竹生島・小袖曽我・吉野天人・富士太鼓・土蜘蛛

■近日発売　下巻　四三〇円　〒75円
《収載曲目》菊慈童・経正・東北・百万・猩々

■近刊
別冊　観世流・謡の総心得

能
能樂書林
千田代区神田神保町三―六
電話(二六一)〇八一三・〇八四八

舞、希代奇観也」と、四座立合の翁が演じられた事を伝えており、慶長の豊国神社臨時祭能と同様、当日の能全体が多武峰猿楽風であったらしい。とすると、この時にも各座一番ずつ新作能を演じてはいないだろうか。

『隆涼軒日録』によると、この日演じられた能は、観世・金剛・宝生・金春の順に、

出雲トツカ・二見ノウラ・浦島・小原野花見・鶴次郎・クマンギリ・打入ソガ・梶原二度ノカケ・サネモリ・ナガラノ橋・星ノ宮・誓願寺・ウカイ

の十三番であり、梶原二度ノカケ・実盛・長柄橋・誓願寺・鵜飼の五番はそれ以前から存在した曲であることが確実であるが、他の八番は新作曲の可能性を持っている。乗馬武具の多武峰様で演じたと思われる曲が、鶴次郎（小林静雄氏の時には不明曲であったが、合戦物で、『未刊謡曲集二』所収）、クマンギリ（熊手判官か）、打入ソガ（夜討曽我）、梶原二度ノカケ（二度掛）と、各座の二曲目に集中している点からは、各座の初番が新作曲である事が想像される。まず観世の出雲トツカは、今の大蛇であろうが、『能本作者注文』等は大蛇を観世小次郎信光作としており、曲柄も信光に適わしい。当時31歳で新作の能方を十分に備えていたであろう信光がこの時に新作し、長兄の観世大夫政盛が演じたのではあるまいか。金剛所演の二見浦は、『謡曲叢書』所収の本文で見ると、猩々や鶴亀より短く、平和な御代を讃美した曲であって、将軍台臨に備えて急ぎ新作した能の観が強い。宝生の浦島は、『能本作者注文』等と宮増作としているが、江戸期に宝生のみが演じていた事実から、この時に宝生が所演した事も考えられないでもない。金春所演の小原野花見は今の小塩であろうが、同曲は金春禅竹作と考えられている。しかも小原野花見を演じたのは、既に金春大夫を子の元氏に譲り、竹田大夫と称していた61歳の禅竹であった。小塩が老人に適わしい曲である点からも、彼が自分のために新作し、晴の場で初演したのではないかと思われる。出雲トツカと同様、小原野花見などと熟さぬ曲名で記録されている事も、新作能であったことの反映ではなかろうか。

以上の推測は、いずれも決定的な説とは言い難いが、各座初番の四曲以外にも新作らしい曲が含まれるし、多武峰猿楽形式だった寛正六年の四座立合能に新作能が競演された可能性は、かなり強いと言ってよいであろう。

香西説を補強し得たかどうか疑わしいが、とにかく、多武峰の能に新作競演の風習があったことは確実である。野外劇風の演出と同様、多武峰猿楽の古態・特異性を示す事実として注目すべきであろう　（42・12・2）



